
30 最後の夜

長い滞在の最後の夜は、それなりに感慨があるものだ。シェフィールドの夜の街をおおう霧までも、今日は特別なものを感じられる。

朝の起床は、いつになく6時。電気会社が、10時までには来るというから、ひよっとして電気を止められてしまったら、掃除機も使えなくなる。大家さんへの引き渡しは2時だが、せめて掃除機だけは早くかけておかなければならない。日本に帰るとなると、生活に使っていたものの、ほとんどを捨てることになる。夏や冬の休みには家族が来たというものの、ほとんどは一人の生活。食料品はかなりの部分を冷凍素材に頼ってきた。それほどうまく使いきれものではないし、最後の週は、つき合いで予想外に外食が多くなってしまった。そうしたものを、みんな捨ててしまうのは、もう、「もったいない」の域を越えて、罪の意識を感じる。冷凍エビなど、いったい何匹分を捨ててしまったことか。このエビの皮をむいた人は、どのくらいの賃金をもらっているのだろう、などと、罪の意識はどんどん広がるが、そうした意識とは裏腹に、ものすごい勢いで、ものが捨てられていく。

イギリスのフラットは、家具や食器が備え付けられているところが多い。私ももちろん、すべて備わっているところを、という条件で選んだ。契約書には、備わっているもののすべてがリストアップされており、出るときにはそれとの照合が行われる。料理に使う器具などは、見たこともないものが多い。最後の照合に立ち会って、はじめて何に使うのかわかった道具がいろいろある。そんなわけで、私は、かなりの台所用品に、手をつけずにいた。だが、どういうわけか、リストにあるものがなくなっているのだ。最初に入るときに、きちんと照合しなかったのもいけないのだが、本当に、まったく覚えのないものもある。たとえば、園芸のハンギング・バスケットがあつたらしいのだが、そんなものは、まったく記憶にない。というよりも、私は園芸が趣味だから、あれば絶対に忘れるはずがない。そんなものが、2、3種類あつて、すっかり当惑してしまった。幸い、大家さんは大目に見てくれたので、出費はなかったのだが、なんとなくいやなものだ。

ようやく引き渡しが終わわり、車で予約していたホテルに行くことになる。まだ、いくつかの荷物を郵便局から送るのと、車を売るという、最後の大事なことが残っている。もちろん、見積もりは、すでに頼んであるが、こんなものは何が起るかわからない。現金を受け取るまでは、まったく安心できないのだ。同じ建物の住人に、あいさつの手紙を入れて、フラットに別れを告げると、いつもあいさつを交わしていたネコが、車のボンネットの上から動こうとしない。あいさつというのは、本当にあいさつで、こちらのネコの鳴きまねどおりに返事が返ってくる。愛想の良いネコだと感心していたのだが、今日は、私が車に乗って、エンジンをかけても動かない。フロント・ガラスを、いくらノックしても、動こうとしない。しかたなく、車から出てネコに近づいたら、ようやくボンネットから降りた。こんなことまでが、特別に感じられるのが、帰国を前に控えた心境といえる。

車も無事に売れて、すごい枚数の小額紙幣を身につけながら、最後の夕食は、インド料理のレストランへ。カレーと、バラバラになるライスが別々の皿に盛られており、それを、ナイフとフォークで食べることになる。ああ、明日からは、これをスプーンで食べる生活に戻るのだ。どちらの生活がいいかと聞かれたら、答えは決まっている。どちらか一方だけの生活にしばらくはいいやだ、ということだ。だが、帰れるのがうれしくないかと聞かれたら、うれしいと認めないわけにはいかない。ああ、あとひとつ寝ると、日本だ。